

2025年2月26日(水)

『オイディプス王』を観劇して

多摩市複合文化施設パルテノン多摩にて、去る2月21日～24日にわたってギリシャ悲劇『オイディプス王』が1年半ぶりに再演されることになりました。そこで22日(土)夜の公演に出かけて来ました。

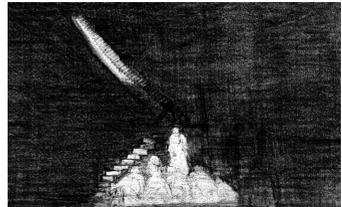
まずは、ホールに入って度肝を抜かれたのは舞台の中央、天井まで伸びた50段もある大きな階段でした。公演が始まる前から、階段は観客の心を釘付けにしていました。周囲を見渡すと、観客の9割が女性で開演前の会話内容から男性客には演劇関係者が多かったように思いました。

さて、2500年の時を越えて人々を魅了してきたギリシャ悲劇の最高峰『オイディプス王』、その不条理な人間関係と王の人生を圧倒的な迫力で迫る作品でした。何と言っても故:蜷川 幸雄(1935-2016)さんが育てたメンバーたちによる演出と演技であり、主役オイディプス演じる三浦 涼介さんの日本人離れした容姿と大胆な演技が一段と魅力ある格調高いものにしていました。一方で、今回初参加という注目の若手のホープ岡本 圭人さんの演技も三浦さんにも劣らず、圧倒的な存在感を放っていました。また、物語の進行役とでも言うべき存在であり、民衆を表象する16人のコロスのリズムカルな演技は見ている私たちを虜にして、テンポ良く場面をつなげストーリーを描き出していました。中高生には少し難解な部分もありますが、時には少し背伸びして骨のある作品に触れてみるのもいいものです。

公演後のアフタートークには、二人の"K"とでも呼ぶべきクレオン役の岡本 圭人さん、コリントスの使者役の大石 継太さんが登壇し、演出家の石丸 さち子さん、司会者としてプロデューサーの栗原 喜美子さんがお相手をしていました。蜷川作品に纏わる新旧役者からの思い、役作りへの努力を伺うことができました。

演劇やミュージカルに詳しい事務職員の方によれば、衣装担当の前田 文子さんも読売演劇大賞や紀伊國屋演劇賞を受賞するなど有名な方だそうです。

今回は、ステージの様子について記憶をもとに絵にしてみました。



参考図書

ソポクレス, 訳:河合 祥一郎(2017)『オイディプス王』光文社(古典新訳文庫), 176頁。